

1. 評価結果概要表

【評価実施概要】

事業所番号	0475102083		
法人名	社会福祉法人 仙台市社会事業協会		
事業所名	グループホーム 楽庵		
所在地 (電話番号)	仙台市青葉区葉山町8番1号		(電話) 022-273-4931
評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成 21 年 2 月 24 日		

【情報提供票より】(平成21年2月1日事業所記入)

(1)組織概要

開設年月日	平成 17 年 12 月 1 日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	10 人	常勤 9 人, 非常勤 1 人, 常勤換算 8.8 人	

(2)建物概要

建物形態	○併設/単独		○新築/改築
建物構造	鉄筋コンクリート造り		
	6階建ての	1階 ~	1階部分

(3)利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	42,000 円	その他の経費(月額)	15,000 円
敷金	○有(126,000円) 無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有() ○無	有りの場合 償却の有無	有/無
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日当たり 1,380 円		

(4)利用者の概要(2月1日現在)

利用者人数	9名	男性 2名	女性 7名
要介護1	3名	要介護2	0名
要介護3	4名	要介護4	2名
要介護5	0名	要支援2	0名
年齢	平均 82.6歳	最低 72歳	最高 93歳

(5)協力医療機関

協力医療機関名	鈴木内科医院、中嶋病院、仙台通信病院、北川歯科医院
---------	---------------------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

このホームは、JR北仙台駅の西方、仙山線に沿った旧住宅街にある。運営法人は昭和3年に設立された歴史ある法人で、ホーム周辺には同法人が運営する養護老人ホーム、これに3年前に建設された特養ホームのユニットケアを中心とする施設群(新館)等も加わり、地域福祉の拠点となっている。ホームは新館(6階建て)の1階にあるが、館内には、認知症デイサービスセンター、地域交流プラザ、ユニット型の特養ホーム、ケアハウス、展望風呂などがある。昨年はターミナルケアの対応指針や本人・家族の同意書を策定するとともに、実際に5ヶ月間、本人や家族の希望を踏まえ関係者の協力の下にターミナルケアに取り組んだ。特に夜間手薄となる職員体制を見直し、最後まで看取ったことが職員の自信につながっている。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	<p>前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)</p> <p>前回の改善課題は、①家族への報告②重度化終末期の2点であった。②については終末期の対応指針やターミナルケアの同意書を策定済みであり、実際に昨年、終末期ケアに取り組んだ実績がある。①については、来訪しない家族への金銭管理報告は徹底されていない面もあるので、さらなる取り組みを期待したい。</p>
	<p>今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)</p> <p>自己評価は職員全員で原案を作成した。職員が作成したものをチーフがこれを調整しまとめた。この作成過程を通じて職員がそれぞれ初心に戻り、見直すことができた。そこで得た気づき等を現場でのケアに活かしている。</p>
重点項目②	<p>運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)</p> <p>会議は定期的開催している。平成20年12月の開催では、町内会、協力医院、消防機関、日赤、包括支援センター、家族等の関係者が参加している。会議はホームの活動実績、地域防災協定などに関して双方向のやり取りの形で行われている。この中で地震対策は緊急課題であるとして、入居者の安全対策と地域との連携について活発な議論が交わされている。</p>
重点項目③	<p>家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)</p> <p>玄関には投書箱が設置されており、入居者が気のついたことを投書するそうである。また、家族の来訪時にもホームでの暮らしについて要望が出されている。例えば個室内での鉢植え栽培、ベットの落下防止、夏季期間での下ズボンの着用などであり、ホームではその都度対応している。なお、平成20年4月には家族に対する満足度調査も実施されている。</p>
重点項目④	<p>日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)</p> <p>ホームのある地区は、グループホームについて昔の老人ホーム的なイメージを持っている人が多い地域であり、入居者が地域へ出かけて交流を持つことは困難であった。この打開策として新館の2階に「地域交流プラザ」を設け、子どもを含めた地域住民に開放し、地域との交流を図っている。昨年の実績では年間約2万4千人もの利用があり、地域との連携が次第に深まっている。</p>

2. 評価結果（詳細）

（ 部分は重点項目です ）

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	職員全員が知恵を出し合い作り上げた理念は、「希・笑・和・絆」の四文字に集約されている。自分らしさ持てる力に“希望”を、日々の生活に“笑い”を、“和む”居場所作りを、家族、地域との“絆”を深め、地域社会での生活の継続である。この理念の定着を目指して日々努力している。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	朝のミーティングや職員会議では、常時理念を確認しているが、新任職員等は理念を十分つかみ切れない場合もあるので、現場での仕事を通して理念を意識させている。笑顔、声かけ、傾聴、見守り等のコミュニケーションを大切にし、自然なつき合いを心がけている。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	古くから住んでいる住民が多く、グループホームに対し昔の老人ホーム的なイメージを持っていた。このため、入居者が地域に出かけて交流を持つことは困難な地域事情のため、逆に地域住民を呼び込むことを考え、施設内に「地域交流プラザ(2階)」や「展望風呂(6階)」を設け、そこでの交流を図っている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	自己評価は職員全員で原案を作成した。これをチーフがまとめた。この作成過程を通じて普段あまり意見が聞かれなかった職員からも意見が出され、ケアを見直す上で役立っている。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議は定期的に行っている。平成20年12月の開催では、ホームの活動実績、地域防災協定の策定などの議題について双方向の形で行われている。この中で地震対策は緊急課題であることから「かけつけ隊」、「みまもり隊」など地域住民から得られる協力体制について活発な議論が交わされている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	ホームが入っている新館を建設する際は、施設長は地域交流プラザの設置について市側に説明し、運営に関し理解と協力を得ている。また、認知症指導者の施設長は市の依頼により講習会等に講師として出席することも多い。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	ホームの広報紙は、特養ホーム等も含め施設全体のもので季刊発行し、家族へ送付している。しかし、情報不足の面もあるので担当職員が暮らしぶりや健康状態等を来訪家族にはその都度伝え、それ以外の家族には定期的に電話連絡している。しかし、金銭管理は来訪者以外の家族へは報告(文書)されていない。	○	金銭管理の報告は確定申告の時期だけでも良しとする家族もあるが、アンケート結果では定期的な報告(文書)を希望する家族も複数見られるので、報告への取り組みを期待したい。
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関の投書箱には入居者が気のついたことを投書するときもある。また、家族からも個室内での鉢植栽培の実施、ベットの転落防止対策、夏季期間での下ズボンの着用などの要望が出され、それに誠実に対応している。家族の満足度調査も行われ、それをサービスに反映させている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	職員の異動は極力抑え、悩み事は何でも上司に相談するよう徹底している。しかし、家庭の事情等によりやむなく離職する例も見られるので、入居者のダメージを防ぐため交代前後の説明や引継ぎを円滑に行うよう努めている。特に職員交代による歓送迎会は入居者と職員が鍋料理を囲み語らうことが恒例となっている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員は外部研修に参加した場合は復命し、全職員が情報を共有している。新任職員には現場実習を通じて目標を立てさせ、担当リーダーがその目標到達度を検証し、指導している。全体の職員研修も法人の研修委員会で企画され、昨年は医療的なケア、高齢者虐待、権利擁護のテーマについて実施している。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	NPO県グループホーム協議会に加入し、管理者等が同業者との交流を図っている。先駆的な取り組みを行っている発表会や施設見学等は自己ホームの運営改善に役立っている。今後は現場職員も参加できるような配慮することが望まれる。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心して、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	新規入居の際は本人の性格、職業・生活歴、症状等を把握し認知症の症状が重い場合は数日間家族同伴での生活体験などにより馴染みの関係作りに努めている。また、併設の認知症デイサービスやショートステイ等の利用者がホームに入居した例も数人見られるが、この場合は以前から交流があったことから既に馴染みの関係が出来ている。		
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は、入居者に対して人生の大先輩として畏敬の念をもっており、喜怒哀楽を共にしながらケアに当たっている。入居者はリハビリ等も手を抜かず一生懸命で、その姿から学ぶことが多いと職員は述べている。また、入居者から「たるんでいる」と叱られることもあり、そのことがかえって職員の励みにもつながっている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
え					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	施設長は、ホームは決して「職員のホーム」であってはならないと職員に徹底しており、職員は言葉掛け、表情、スキンシップ、五感などを通じて入居者の思いや希望の把握に努めている。自宅生活を引き継いだ暮らしを基本に、入居者本位のケアに努めている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	毎月、全職員参加で会議を開催し、職員間の情報を共有している。統一した支援を行うために採用している「申し送りノート」はプラン作成の基になっており、これを本人の視点に立った介護計画に反映させている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	3ヶ月1回介護計画を見直し、月1度は本人や家族の意向を確認し、同意を得ている。見直しの例では便秘予防を下剤からオリゴ糖使用への切り替え、転倒骨折者の移動確保のための車椅子使用、居室での事故防止のための障害物の点検などで入居者の状況変化に対応した見直しを行っている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	新館内に認知症デイサービスセンター等があるので、ホームでのデイサービス等の受入れは考えていない。昨年は医療連携体制(訪問看護)を活かして、ターミナルケアの入居者に医療処置を行いながらの生活継続支援を行っている。また空家になっている自宅を見に行く場合の付添支援や通院の付添支援もしている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	従来からのかかりつけ医を利用している例もあるが、遠方にいる家族や年齢により付き添いが困難になっている家族も多いことから、同意が得られればホームの協力病院を紹介している。また、ホームの近くには同一法人系列の訪問看護センターもあり入居者に安心感を与えている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	前回の外部評価の際、ターミナルケアへの早急な対応が指摘されたため、その対応指針や本人、家族の同意書を策定している。実際に昨年の5ヶ月間本人や家族の希望を踏まえ関係者の協力の下にターミナルケアに取り組んだ。日中、夜間の勤務体制の見直し、特殊浴の利用など風呂好きな入居者の希望を最後までかなえたことが職員の自信につながっている。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	個人情報保護の取り決めは目につきやすい場所に掲示し、全職員が確認し合っている。ケアの中でも特に「おむつ交換」や「トイレ介助」などの場合は入居者の尊厳を傷つけないよう言葉掛けには細心の注意を払っている。また、個人記録等の管理を徹底し、不要文書は情報が漏洩しないよう処理している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員の中には、家族介護の経験者もおり、入居者には自然の形で向き合っている。本人のペースに合わせて、ケアの工夫や努力次第で入居者もそれに答えてくれるとの職員の弁。特に継続的な散歩や足踏み運動により、便秘が改善されたときの入居者からの感謝の一言が職員のやりがいになっている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者の希望を踏まえ、週2回の昼食は「麺類かご飯」、又は「パンかご飯(粥)」の選択食が取られている。食事は気の合う人同士が同じテーブルに座り、食が進まない方にはさり気なくサポートしていた。また、食事後の食器洗いなどの後片付けを入居者と職員が一緒になって行う姿もみられた。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入居者は自分の好きな時間に入浴できる。その時の気分や健康状態によってホーム専用の浴室を利用したり、施設内6階にある展望風呂を利用したりなど思い思いの入浴を楽しんでいる。昨年場合は、風呂好きなターミナルケアの入居者のために併設の特養ホームにある機械浴を活用し、最後まで入浴支援を行った。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	華道・茶道・書道に堪能であったり、俳句や読書の趣味を持っていたりなど多才な入居者が多い。このため、ホーム内や施設全体の行事や趣味活動の場で活躍してもらっている。このほか、女性は洗濯や家事の場で、男性の場合は物資の運搬、ゴミ出しなどの力仕事の場でそれぞれの役割を担ってもらっている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	ホームの裏側には車の通れない散歩道があり、散歩には職員が同行している。華道・茶道用の生花や茶菓子の買物、読みたい本の購入、地下鉄での買い物、神社・仏閣への参拝など入居者の希望に合わせた外出支援をしている。また、四季折々には観光ドライブや外食など、入居者の楽しみとなっている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	施設長は人間の尊厳を最重要視し、職員も鍵をかけることの弊害を理解しており日中は鍵をかけていない。以前、帰宅願望が強かった入居者は今は緩和され外出するようなことはなくなった。しかしそれ以外で職員が気がつかない間に外出した例も数回あったので、事故防止のため玄関にチャイムを設置している。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	ホームが入居している施設群全体としては年2回の避難訓練が実施されている。特に地震対策は緊急課題として運営推進会議を通じて地域との連携関係が議論されており、その具体策は法人内の地域防災安全対策委員会で検討している。しかし、ホーム独自の避難訓練は平成19年5月以降実施されていない。	○	ホームの夜勤体制は1人であり、新任職員でも採用後3ヶ月に入れば夜勤を担当する。職員からのヒヤリングでも夜間の地震発生等への対応を不安視する声も聞かれるので、ホーム独自の避難訓練(夜間想定訓練を含む)について実施することが望まれる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分の摂取量は毎日チェックしている。体重の測定も月1回定期健診で実施している。献立では便秘予防のため植物繊維の多い食品を取入れており、カロリー面では併設の特養ホームの管理栄養士の助言や指導を受けている。調査日の昼食は麺類であったが食べる時麺が滑らないよう割り箸を使用していた。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関を入ると左側にはソファが置かれた談話室があり、金魚が泳ぐ水槽が癒しをかもし出している。カウンター式の厨房と広い食堂があり、その奥に小上がりの畳敷の和室もある。居室に通じる廊下は中庭を囲む形で設けられ、家庭的な雰囲気を漂わせている。調査日、和室には雛人形が飾られ季節感も感じられる。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には、馴染みの家具、ベット、テレビ、テーブル、椅子などが置かれ、家族の写真やタペストリーも飾られている。室温は適温に自動設定され、加湿器により湿度も保たれているなど快適な住環境が整えられている。自室で鏡に向かい整容している入居者の様子が垣間見られた。		